

複構造炉の住居跡・集塊する土坑墓群

— 市川市高谷津遺跡の事例紹介と若干の考察 —

渡辺 新

目 次

はじめに

- | | |
|----------------|---------------|
| 1. 高谷津遺跡の概要 | 3. 集塊する土坑墓群 |
| 2. 複構造炉の住居跡 | (1) 土坑墓群の特徴 |
| (1) 複構造炉の住居跡 | (2) 変遷と系譜（予察） |
| (2) 複構造炉の系譜と類例 | おわりに |
| (3) 出出土器の比較検討 | |

はじめに

加曾利E式土器に磨消繩文の手法が一般化して間もなく、いわゆる「環状集落」の形成が止む。下総台地においては、全容が明らかとなった環状集落跡——東京湾岸域に調査例は限られるものの、子和清水貝塚・高根木戸貝塚・草刈貝塚・有吉北貝塚いずれも共通している。「環状集落」直後、それ以前には積極的に居住されることのなかった内陸部に林台遺跡・長田雉子ヶ原遺跡・多田遺跡・墨木戸遺跡などの大規模集落跡が出現する。これら大規模集落跡の特徴は、住居跡群が環状を呈さず、貝塚が形成されない、そして一體別型式の時間幅をもたなかつたり、複数の細別型式に亘っても稱名寺式新段階まで継続しない点が挙げられる。臨海部においては大規模集落跡が見られず「環状集落」の周辺で小規模集落跡を散見するに止どまるが、引き続き貝塚は形成されている。

下総台地の当該期の住居跡には、汎関東的にみても類例に乏しい異質な特徴を有するものがあり、加納実氏が注意を喚起している（加納1995）。なかでも、地床炉ないし土器片圍炉に土器埋設部を併せもつ複数の燃焼部からなる“複構造炉”（注1）の住居跡は、事例の増加が近年著しい。

当該期の墓制については、「環状集落」に一般的であった窓屋墓がみられなくなり、集塊する土坑墓群が一形態をなすようである。これは數基～10基前後の土坑が相互に切り合ひブドウ状に塊まる形状で、埋土にロームを多く含む短時間に埋め戻された状況にある。人骨は未検出ながら窓屋墓の後の埋葬例として堀越正行氏が指摘していた（堀越1985・1986）が、権現原貝塚の事例においてヒトの歯や骨片が検出され、墓であることが確実となった。

高谷津遺跡1983年次調査地点では、複構造炉の住居跡、集塊する土坑墓群が300m²に満たない調査区から相次いで検出され、それぞれの初出例となつた。しかしながら報告は諸般の制約から概略に終始し、注意が喚起されている遺構であるにも拘らず、その初出例が広く周知されるに至っていない。そこで、若干の考察を加えて詳細を紹介することにしたい（註2）。

1. 高谷津遺跡の概要

位置と環境 高谷津遺跡は市川市曾谷4丁目に所在する地点貝塚遺跡である。下総台地西南端にあたる市川市北部域に広がる台地は、東京湾からのびる国分谷・大柏谷によって、国分台・曾谷台・柏井台の3つの台地に区割され、遺跡は曾谷台の南半部の国分谷側に位置している。ただし国分谷には直面せず、国分谷からのびる高谷津支谷の谷頭に南面する標高22m前後の台地平坦部の立地である。支谷との比高差は現況で12mを測る。遺跡の主要時期となる中期末葉から後期初頭の頃、高谷津支谷に海水の浸入はあり得ないが、500mほど先の支谷谷口と国分谷との合流点付近では海水の広がりが予想される。

近傍の遺跡には、東隣に後期前葉から晩期初頭を主要時期とする馬蹄形貝塚の曾谷貝塚が、南方に中期中葉から中期後葉の大規模集落跡である向台貝塚といった、高谷津遺跡に前後する時期の遺跡が分布している。

調査の沿革 高谷津遺跡の存在が確認された経緯は、1979年の曾谷貝塚の史跡指定を契機に、隣接周辺での住宅建設等の事前調査が実施されるようになったことに因る。曾谷貝塚西隣の高谷津遺跡の地における発掘調査は、市教育委員会により1980～1985年の間、8次に亘り実施されてきた。その結果、中期末葉から後期初頭の小規模な集落跡が、曾谷貝塚の馬蹄形の貝層部から60～70mの距離をおいて展開していることが明らかになった他、前期黒浜式、平安時代の住居跡等も検出されている。

これら調査については、順次その概要が「曾谷貝塚」と冠して報告されているが、遺跡名を「曾谷貝塚」とするには躊躇する。たしかに中期末葉から後期初頭の時期は馬蹄形貝塚形成の直前期であり、曾谷貝塚との関係は問われるべきであろうが、それを理由に「曾谷貝塚」として包括するのでは際限が無い。一定の距離をおく以上、やはり別個の遺跡として新たに遺跡名を付すべきと考える。曾谷貝塚西隣の地は旧字を「高谷津」という。遺跡名は旧字名をあてがうことが慣例であり、曾谷貝塚の地の旧字名「築地」とも異なり、二者を区別するに簡明である。

8次に亘る調査の報告は、年次ごとに行われているために掲載書が数冊に分散している。さらに、曾谷貝塚隣接周辺の調査は西隣の地に限らず東隣や南隣でも実施されているが、調査地点番号はその位置に拘わることなく調査順に付されているため、高谷津遺跡についての記載がいずれであるのか検索を困難にしている。そこで、以下に報告の索引を記しておくことにす



図1. 遺跡の位置 (1/5000)

る。索引は報告書名、掲載書、発行年、頁の順としてある。

- ①1980年次調査 a 地点 「曾谷貝塚第2地点（曾谷4丁目 555番地所在遺跡）」
『昭和55年度埋蔵文化財発掘調査報告』1981, p18~19
- ②1980年次調査 b 地点 「曾谷貝塚第3地点（曾谷4丁目 554番地所在遺跡）」
『昭和55年度埋蔵文化財発掘調査報告』1981, p20~26
- ③1980年次調査 c 地点 「曾谷貝塚第4地点（曾谷4丁目 553番地所在遺跡）」
『昭和55年度埋蔵文化財発掘調査報告』1981, p26~27

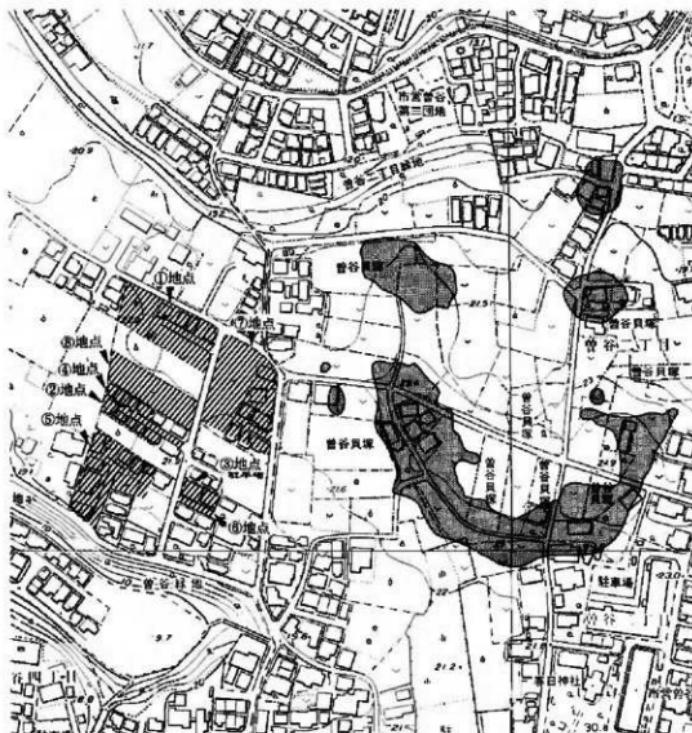


図2. 遺跡既報地点位置 (1/3000)

- ④1982年次調査地点 「曾谷貝塚第6地点（曾谷4丁目 554番地所在遺跡第2地点）」
『昭和57年度埋蔵文化財発掘調査報告』1983, p61~66
- ⑤1983年次調査地点 「曾谷貝塚第7地点（曾谷4丁目 554番地所在遺跡第3地点）」
『昭和58年度埋蔵文化財発掘調査報告』1984, p56~70
- ⑥1985年次調査 a 地点 「曾谷貝塚第15地点（曾谷4丁目 553番地所在遺跡）」
『昭和60年度市川市埋蔵文化財発掘調査報告』1986, p21~24
- ⑦1985年次調査 b 地点 「曾谷貝塚第17地点（曾谷4丁目 555番地所在遺跡）」
『昭和60年度市川東部遺跡群発掘調査報告』1986, p16~73
- ⑧1986年次調査地点 「曾谷貝塚第18地点（曾谷4丁目 555番地所在遺跡第2地点）」
『昭和61年度市川東部遺跡群発掘調査報告』1987, p4~59

以下、高谷津遺跡の調査地点の表記については、記述の繁雑を避けるために行頭に掲げた丸数字を用いることとし、図2~4の丸数字もこれに対応する。なお、各調査地点の住居跡等の遺構番号については変更していない。

集落跡の概況 中期末葉から後期初頭の集落跡の規模は、既掘部における遺構分布と未掘部地表面の該期土器の散布状況から、およそ南北80m、東西100mの広がりで、遺物と遺構の検出が無かった①・③・⑥地点は集落跡の外縁部にあたると推定される。これまでに10軒の住居跡の検出があるが、残る未掘部の面積とそこでの土器散布状況からすると、住居跡の数が15軒を超えることはないであろう。集落跡の形状は、住居跡等がブロック状のいくつかの纏まりをもち、全体として南東方向に開く弧状を呈するようである。

検出された住居跡を概観する。②地点1号住居跡は、小判形を呈する皿状の竪穴住居跡である。柱穴は2口、長軸を3等分する位置に並ぶ。炉は南側の柱穴間にわずかな焼土の分布として確認される。伴出遺物は数点の土器細片のみで、型式は加曾利E IV式、称名寺式（古段階）である。②地点3号住居跡は、平安時代の住居跡との重複により柱穴と炉のみが確認されるに止どまる。柱穴は「3号住居跡に伴う柱穴」として報告書図示されるものが長方形に並び、あるいは孤立柱建物跡であるかもしれない。炉は長方形の東長辺の中央にわずかな焼土の分布として確認される。伴出遺物は報告書記載がないが、②地点1号住居跡と同時期であるという。⑤地点2号住居跡は、後述する複構造炉の住居跡である。⑦地点5号住居跡は、不整形の竪穴住居跡である。柱穴は15口ある内、竪穴中央の3基の炉を開む5口が他と比較すると深くて径も大きく、主柱穴として抽出できる。炉は地床炉で3基が密接して並び、内2基が切り合う。伴出遺物は加曾利E IV式の上器細片が数点の他、磨石の出土がある。⑦地点7号住居跡は、柄鏡形住居跡である。8号住居跡とほぼ同一地点で重複している。擾乱が床面レベルより深くにまで及ぶために竪穴壁は確認されない。柱穴は密に円列する。小判形の対ピットが西方向に開いており、対ピット間には埋甕が垂直位の姿勢で設置されている。炉は地床炉で柱穴円列の中

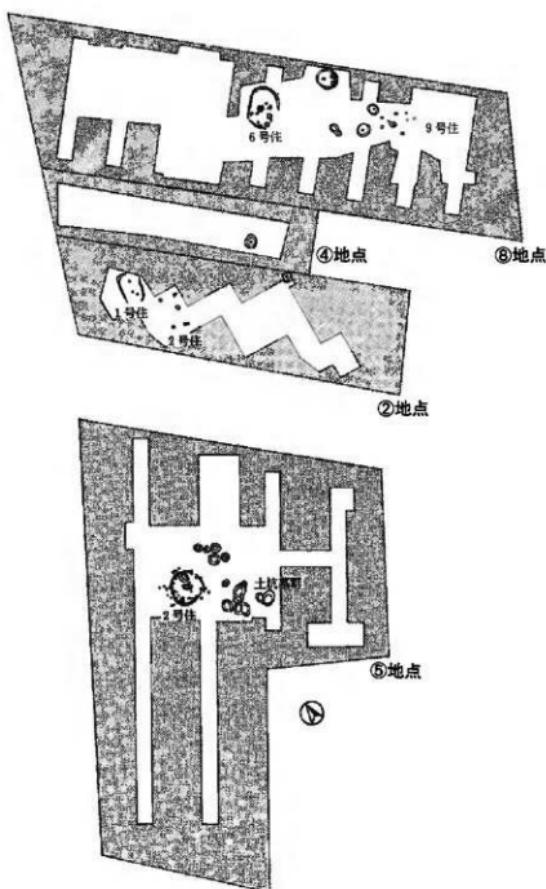


图3. ②④⑤⑥地点遗物分布 (1/600)

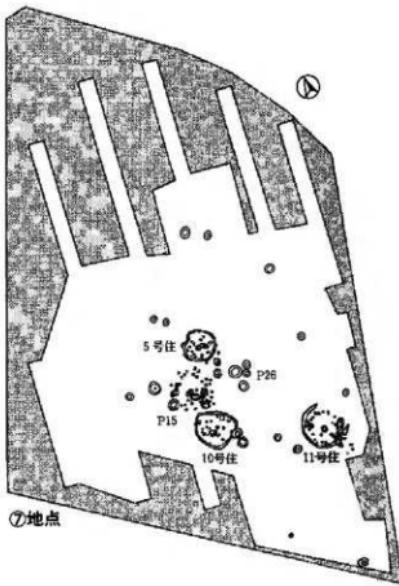


図4. ⑦地点遺構分布 (1/600)

央にある。伴出遺物は埋甕に用いられた深鉢形土器のみで、型式は後期に下がる加曾利E式系である。⑦地点8号住居跡は、柄鏡形住居跡である。7号住居跡に同様で竪穴壁は確認されない。柱穴は密に円列し、やや大形の対ピットが東方向にハ字形に開いている。埋甕の設置はない。炉は地床炉で対ピットに接するほど偏った位置にある。伴出遺物は認められない。⑦地点10号住居跡は、不整形の皿状の竪穴住居跡である。柱穴は炉の周囲に集まる傾向にあるほかは秩序ある並びをみることはできない。炉は地床炉で南西に偏った位置にある。伴出遺物は加曾利E IV式の土器細片が数点の他、称名寺式破片の土器片鱗が出土している。⑦地点11号住居跡は、柄鏡形住居跡である。竪穴は円形を呈し、柱穴が壁沿いに巡っている。柱穴は深さにおいて際立つ4口が整然と台形に並び、主柱穴として抽出できる。主柱穴がつくる台形の底辺中央に薬研状の対ピットが付く。埋甕の設置はない。炉は地床炉で中央やや対ピット寄りに位置する。伴出遺物は加曾利E IV式、統加曾利E式、称名寺式(古段階)の破片が10数片の他、設置された石棒2点がある。石棒については、⑦地点15号土坑、26号土坑出土の石棒と共に資料紹

介を済ませている（渡辺1995）。⑧地点6号住居跡は、小判形を呈する皿状の堅穴住居跡である。柱穴は南半に側在して北半にはみられない。炉は石皿破片や大形砾を用いた石函炉で、中央西壁寄りに位置する。西壁中央には炉に対面するように平石が貼付けられており、出入口部と考えるに恰好の位置であるが、対ピットや埋甕は検出されない。伴出遺物は加曾利E IV式の略完形「両耳壺」と数片の破片の他、打製石斧、砾等？が出土する。⑨地点9号住居跡は、報告書で「3号炉跡」とされる周囲に柱穴が巡るもので、仮に9号とした。造構確認面がソフトローム層上面にもかかわらず炉の掘り込みが明瞭に確認されるので、堅穴住居跡であろう。柱穴は一部のみの検出と考えられ全形を把握しえないが、北端で東西に並ぶ3口は比較的深く等間隔で直線に並ぶ様子がみられる。炉は地床炉である。伴出遺物は無いが、付近で出土する土器片は加曾利E IV式が主体となる。

貝層 貝層はいずれも造構内堆積である。住居跡内に貝層がみられたのは、⑤地点2号住、⑦地点11号住、⑨地点9号住の3軒。貝の量は⑤地点2号住で堅穴内全体に広がる以外、埋土層中の一部や柱穴内に稀薄な堆積をみるのみである。土坑内貝層は、図3～4に●印を付けた4基にみられた。④地点、⑥地点土坑内は稀薄な堆積であるが、②地点、⑦地点土坑内では60～70cm堆積する。各地点いずれの貝層も貝種はほぼ共通し、ハマグリ・イボキサゴを主体とした軟水種の構成となる。魚骨・獸骨の出土はほとんど無く、唯一⑦地点土坑でサメ目・マイワシ・マアジ・スズキ・クロダイ、シカ・タヌキ・ネズミ・種不明鳥類、と豊富に検出されるものの各々微量である。

2. 複構造炉の住居跡

(1) 複構造炉の住居跡

⑤地点2号住居跡が複構造炉の住居跡である。集落跡推定範囲の南西端部に位置している。平面形が略円形を呈する堅穴住居跡で、堅穴規模は径4.0～4.3m。壁は全体的に立ち上がりが明瞭ではあるものの、床面から確認面までの高さは10cm程度しかない。堅穴内の貝層が「マウンド状に堆積していた」との報告書記述からすると、少なくとも堅穴内貝層の上面レベルまでの高さ40～50cmの壁を有していたものと考えられる。床面はほぼ平坦であり、炉の周囲が堅固である他はやや軟弱な傾向にある。堅穴埋層は堅実に黄褐色土層が薄く堆積した後、混土貝層が形成される。貝層はハマグリを主体とし、アシリ・シオフキ・ハイガイ・アカニシ等の軟水種で構成され、イボキサゴがごく少量である点は留意したい。魚骨・獸骨は検出されない。

複構造炉は堅穴中央に設けられている。掘方平面形は東西に長く西方がすぼむ卵形を呈し、規模は長軸102cm、短軸76cm。床面からの深さが約40cmで底面は平坦、西壁はほぼ垂直に立ち上がり、東壁へ向かうにつれ緩やかな立ち上がりとなる。深鉢形土器の設置が西壁際にあり、底面と西壁がなす角に底部を当てて口縁部を東へ向け、長軸線上に斜め30°ほどの角度をもた

せ、3～4層の土層によって固定されている。図5では口縁部の上端が掘方から突き出した表現になっているが、該部にかかる竪穴セクション図には床面から盛上がる3～4層類似の焼土や灰の混じる茶褐色土層が確認できるので、土器は完全に上中に埋められる形であったといえる。土器設置の以東は3～4層を口縁部の下端の高さまで充填、また口縁部の幅に合わせて掘方が埋め狭められる。埋め狭められた両壁面には設置土器とは別個体の深鉢形土器胴部の分割破片5片が袖状に貼り付けられている。すなわち炉としての機能は、掘方に造作が加えられたうえの、袖状に貼り付けられた土器片の内側約50×60cmの範囲で底面を3層上面とする深さ約20cmの部分+土中設置土器の容器内、ということになる。そして掘方から突き出す設置土器上端には土艘頭様に土が被せられ、形状が靴のような格好となる。炉内の堆積層にあたる2層は灰層であり、平均10cmほどの厚みをもち設置土器内では厚さが20cmに及ぶ。1層は柱穴埋土と同様の暗褐色土層で住居廃絶後の堆積土と考えられる。掘方造作の窓の充填土である3～4層

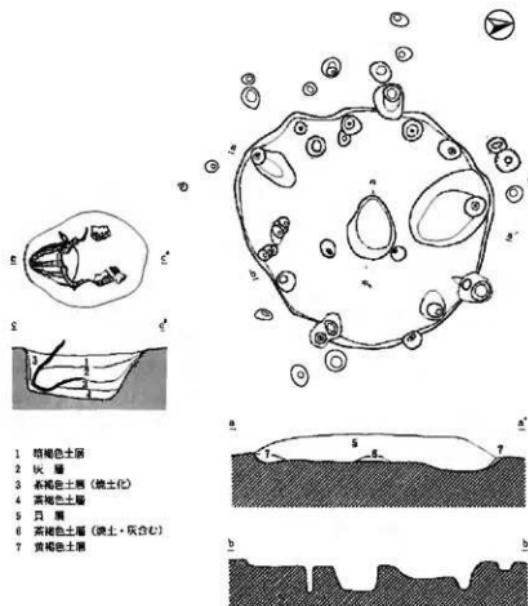


図5. 複構造炉の住居跡 (住居跡1/80 炉1/40)

は、4層が茶褐色土層、3層が炉の燃焼面になることによる4層の焼土化した層である。

柱穴は●印を付けた、複構造炉の両脇にある2口、東壁に掛かる2口、北～西壁際に密に並ぶ6口が深く、いずれも垂直に掘られている。これら柱穴の並びは、複構造炉の長軸ラインに對してほぼ対称となり、炉両脇の2口を結ぶ線の西側に柱穴が多く東側に少ない、という特徴をもつ。竪穴の外には柱穴様の小ピットが多くみられ、あるいは軒先を補強するものとも考えられるが、そのほとんどが甚だ浅くて規則的な並びにない。唯一、西壁に掛かる大小2口が重複するピットは、比較的深くて炉長軸ライン上に概ね位置しており、上屋支柱穴の可能性がある。

北壁下の床面にみられる皿状を呈する凹部は、径1.5m×1mほどで深さ約20cm。凹部底面は平坦に整っており、また竪穴内貝層が直接しているので擾乱に原因するものではない。住居内の一施設として機能していたと考えられる。

伴出土器は、複構造炉に用いられた土器のほかに竪穴内貝層下部から大小多くの土器片の出土がある。炉壁に貼り付けられる土器片については報告書に図示されないが設置土器とは別個体になる。1は複構造炉設置土器である。口縁部文様帯が半周分折り取られており、折り取られた側を下端にして設置されていた。口径353mm、器高503mmで口縁部の彎曲がほとんどなく直線的に立ち上がる器形である。口縁部文様帯は渦巻文を喪失し隆線による楕円区画文のみとなる。岡左方の楕円区画文では陥線の脛をなぞる沈線があるが右方に無く、区画隆線上部が磨滅されて口端部と一体化しているので、右方は上部の区画が明瞭でない。楕円区画文の連接部で口端がわずかに突起するのは渦巻文の痕跡であろう。胴部文様帯は沈線による懸垂文で磨消絶文部の幅が縄文部の幅より広い。縄文は単節RL。内外面共に被熱が著しい。『市川の繩文土器I－収蔵の早・前・中期の土器－』(市立市川考古博1986)に「JP69」として写真掲載がある。2は推定口径380mmの1と同様の「キャリバー形土器」であるが、口縁部の彎曲が比較的強く半口縁である。縄文は単節RL。3、4は「意匠充填系土器」(加納1994)と仮称されるものである。3は推定口径205mmで胴部上半が膨大し口縁部の内縁が強い。胴部上半に大柄な渦巻文が2本の隆線で描出される。縄文は単節RLで隆線とは沈線で隔てられている。4は推定口径270mmで口縁の彎曲はあるがほとんど内縁しない。2本の低い隆線で描出される大柄の渦巻文が横位に連なり、この間を渦巻文輪郭に沿った沈線区画文が充填され、相接部に疑似隆線がつくられる。疑似隆線は渦巻文外郭の一部でもみられ、平行する沈線による疑似隆線となっている。縄文は単節RLで隆線あるいは疑似隆線とは沈線で隔てられている。『市川の繩文土器I』「JP71」写真掲載。5は「横位連携弧線文土器」(加納1994)と仮称されるものである。推定口径210mmで口縁の彎曲が弱く内縁しない。器上半に比高差の大きい沈線による弧線文を横位に連繋させ、弧線文の間に上端が弧線輪郭に沿った形の懸垂文が入り組む文様構成であろう。縄文は単節RL。6～8は「キャリバー形土器」の胴部、底部の小片。9は細い

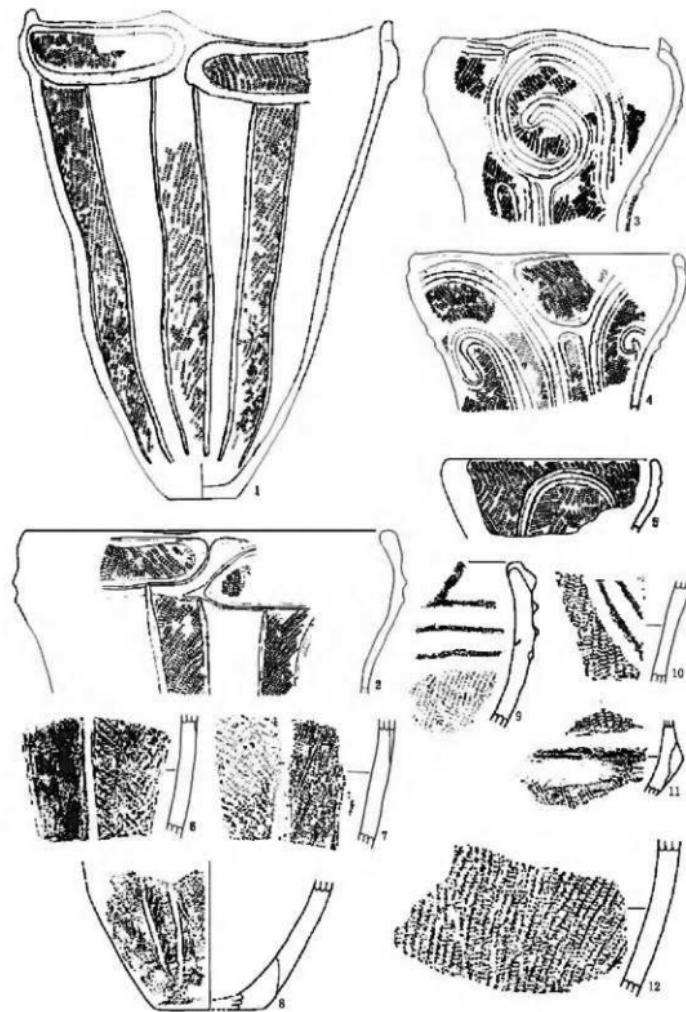


图 6. 伴出土器 (实测图 1/5 拓影图 1/3)

隆線による文様描出で縄文と隆線は沈線で隔てられ、10と同じく「意匠充填系土器」の類であろう。11は隆線下に条線がある、「両耳壺」であろうか。12は縄文のみの肩部破片。以上の土器はいずれも「縄紋の抹消が一般化」した加曾利E式の「新しい部分」（山内1940）に相当する。『日本先史土器図譜』第II輯（山内1940）の「新しい部分」の標本資料との比較においては、横巻文を喪失する等の口縁部文様の退化傾向が強く標本資料より新しい。いわゆる吉井城山編年（岡木・戸沢1965）準拠に照らすところでは、「E II式土器的なキャリバー形土器（口縁部区画紋・胸部懸垂紋構成）」と「横位連繋弧線紋土器」が併出しており「加曾利E III式土器の上限」に相当する（加納1989）。

複構造炉の住居跡は伴出土器から高谷津集落において最も古い住居跡と判断される。次いで古いものは⑧地点6号住居跡であるが、伴出土器は複構造炉の住居跡との間、「焼き具合が悪い」。

（2）複構造炉の系譜と類例

複構造炉の系譜は、複数の燃焼部からなる特性にあり、住居跡伴出土器が加曾利E式の「新しい部分」である点に鑑みると、複式炉が先ず候補に挙げられよう。複式炉は大木9式～10式期に福島県域北部を中心に分布し、土器埋設部・石組部・前庭部が長軸に並び、前庭部を久く場合もある。土器埋設部は容器内部を開口させる形で土器が完全に土中に埋められており、高谷津事例と共に通する。ただし複式炉の土器の設置が垂直位であるのに対して高谷津事例は斜位となるが、埼玉県古井戸遺跡J-49号住居跡の複式炉の設置土器は斜位であり（図11）、これを介在させれば地方差として理解の範囲内といえよう。石組部は高谷津事例での炉壁に土器片が貼り付けられた部分に対比され、下総台地が石材調達に困難な地理にあることから、上器片貼付によって石組に代替させたと考えられる。前庭部は溝あるいは石材により区画されるか、皿状に掘り凹めるなどして造られる空間であり、一見するところでは高谷津事例には認められない。ところが東壁に掛かる2口の柱穴と複構造炉の両脇にある柱穴を結んでみると、前庭部とよく似た空間を形づくっている様子が見える。

複式炉の住居跡は強い「企画性」をもって構築されることが知られている（森ほか1985）。「企画性」の必要条件は、要約すると、①住居建設にあたって円を基調とし、円の中心は炉の主軸上にある。②炉主軸を中心とする左右対称の側柱穴を有し、側柱穴は炉の燃焼施設上を横断する線上に配置される。③軸頂柱穴あるいは軸頂対柱穴を有し、大木9式では住居プランに添った柱穴配置がなされる。④主柱穴は軸頂側に集中し、軸底側には一定した柱穴配置が認められない、という4項目からなる（森1996）。高谷津事例にこの4項目を照らしてみよう。①豎穴平面形は略円形で、円の中心は炉設置土器の口縁部の辺りとなり主軸上に位置している。②炉の両脇にある2口の柱穴は、炉長軸に左右対称であり「側柱穴」と同様である。「側柱穴」を結ぶ線は、複数燃焼部の一方である土器片貼付部の上を横断している。③炉長軸方向、設置土

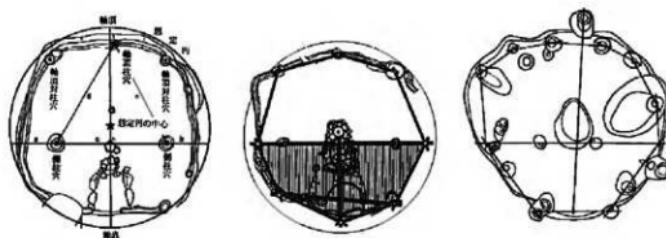


図7. 複式炉の住居跡の部位名称（左）と上屋構造想定（中）

・複構造炉の住居跡の上屋構造想定（右）

器側の「軸頂側」に相当する北～西壁部では、炉長軸ラインを対称にした2口一対となる形の柱穴が3組合計6口、壁沿いに並んでいる。また「軸頂」位置には上屋支柱穴とみられるピットがある。④「軸頂側」では主柱穴として抽出される柱穴の数が6ないし7口あるのに対し、「軸底側」となる東側では2口と少ない。以上のように、高谷津事例は細部で異なる部分があるにせよ、複式炉の住居跡に認められる「企画性」の必要条件を満たすことになる。

上屋構造の想定では、壁に沿う桁を渡そうとした場合、「軸頂側」と「軸底側」の柱穴間の距離が極端に遠くなるうえ、その間の桁が堅穴プランを外れざるを得なくなる。しかし「側柱穴」に両端が壁にまで届く梁を渡し、梁の両端を支点にして桁を巡らす方法をとれば、解消できる。「この方法は複式炉を有する住居に共通して用いられた」と推測されるもので、「浮桁構造」と呼称されている（森1996）。また「浮桁構造」を想定することによって、例えば「軸底側」の2口の主柱穴と梁との間に左右みられる浅い柱穴が「浮桁」を補強する機能にあった様子が窺える（図7）。

下総台地の複構造炉の住居跡については既に集成がされており（中山1995）（加納1995）、重複するところではあるが、管見に触れた事例を抄録して参考に供したい。あわせて南関東地方における複式炉の住居跡の唯一例である埼玉県古井戸遺跡の事例も抄録しておく。

○佐倉市寺崎一本松遺跡（渋谷・青山1987） 図8-1

6軒検出された加曾利E式後半の堅穴仕居跡の内、第2号遺構が地床炉部+上器埋設部の複構造炉となる。皿状の地床炉で、炉北半に底部切断の深鉢形土器が設置される。平面図からの判断では深鉢形土器は斜位のようである。設置土器の口縁部が向く方向を住居の主軸とみた場合、壁沿いに並ぶ柱穴はほぼ左右対称となっている。報告では、結線が設置土器の上を横断することになる柱穴を「棟柱」と想定する。

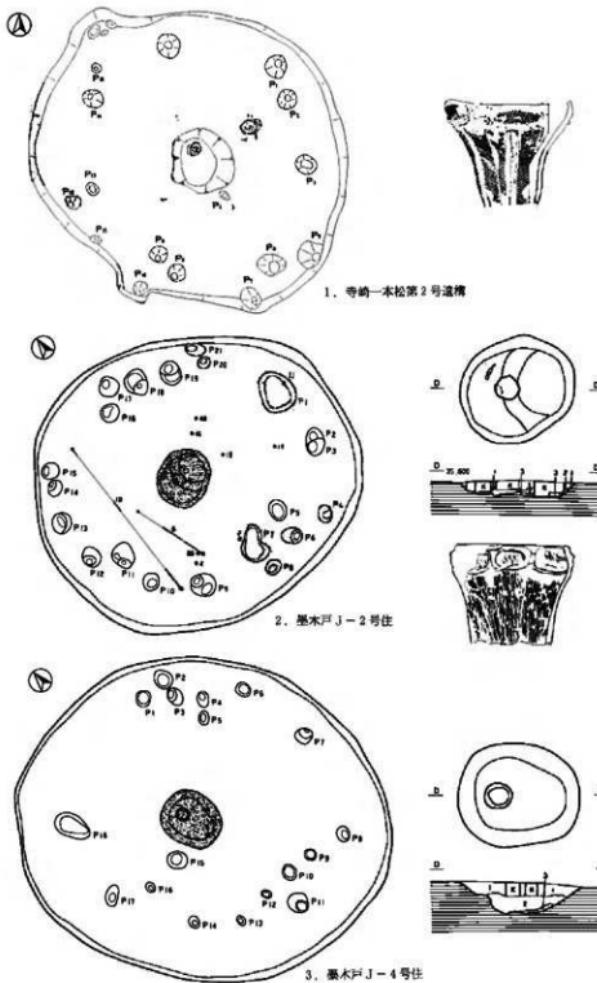
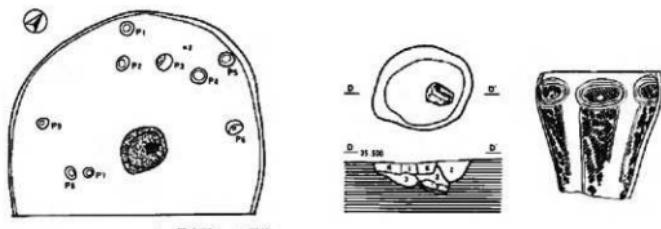
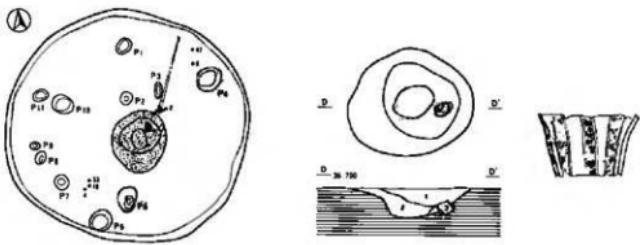


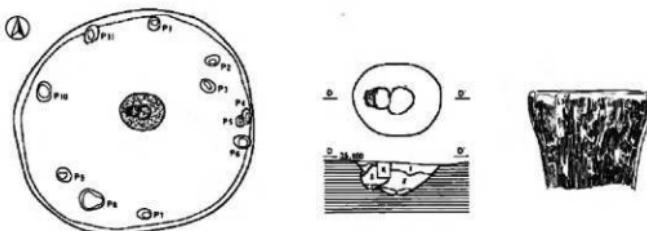
図8. 下総台地の複構造炉の住居跡 (1) (住居跡1/100 炉1/50 土器1/10)



4. 墓木戸J-5号住



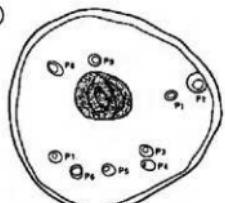
5. 墓木戸J-19号住



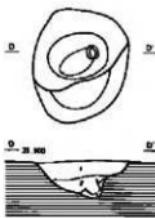
6. 墓木戸J-21号住

図9. 下総台地の複構造炉の住居跡 (2) (住居跡1/100 炉1/50 土器1/10)

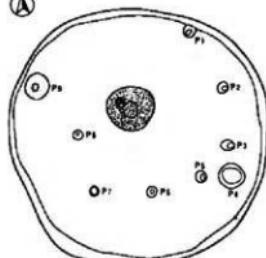
Ⓐ



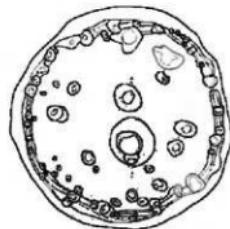
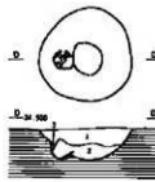
7. 墓木戸 J-26号住



Ⓐ



8. 墓木戸 J-38号住



9. 武士

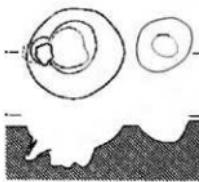


図10. 下総台地の複構造戸の住居跡 (3) (住居跡 1/100 炉 1/50 土器 1/10)

○酒々井町墨木戸遺跡（中山1995） 図8～10-2～7

40数軒検出された「加曾利EⅢ式期」の住居跡の内、J-2号住、J-4号住、J-6号住、J-19号住、J-21号住、J-26号住、J-38号住の7軒に、地床炉部+土器埋設部の複構造炉がみられる。J-2号住事例は、テラス部を有する皿状の地床炉で、炉底面とテラス部段差壁がなす角を若干掘り凹め、斜め20°ほどの角度で底部切断の深鉢形土器が設置される。なおテラス部は掘り過ぎの可能性があるという。J-4号住事例は、摺鉢状の地床炉で、炉壁立ち上がり下部に土器抜去痕がみられる。J-6号住事例は、皿状の地床炉で、炉底面北半を楔形に掘り込み、斜め35°ほどの角度で底部切断の深鉢形七器が設置される。J-19号住事例は、摺鉢状の地床炉で、炉壁立ち上がり下部を掘り凹め、斜め50°ほどの角度で口縁部・底部切断の深鉢形土器が設置される。J-21号住事例は、摺鉢状の地床炉で、炉壁立ち上がり中部を掘り凹め、斜め40°ほどの角度で底部切断の深鉢形土器が設置される。J-26号住事例は、摺鉢状の地床炉で、炉壁立ち上がり下部を掘り凹め、斜め50°ほどの角度で底部切断の深鉢形土器が設置される。J-38号住事例は、摺鉢状の地床炉で、炉壁立ち上がり中部を掘り凹め、斜め40°ほどの角度で底部切断の深鉢形土器が設置される。これらの炉は共通して、地床炉部では明瞭な燃焼痕が認められ、また焼土や炭化物が堆積しているが、土器埋設部では土器内外面が被熱するものの容器内には特に焼土や炭化物が多量に含まれている等の状況がみられない。報告では、地床炉部は「一般的な煮焼き等の機能を有し」、土器埋設部は地床炉部とは「別の機能」にあったと考察される。住居跡形態については、当該期に通例の住居跡と変わらない竪穴住居跡であり、柱穴の並びに特に規則性はなく、また「企画性」も認めるることはできない。ただJ-21号住事例では設置土器の口縁部が向く延長上の壁際に対ビットがみられることから、報告ではこれを指標に「埋設土器の向いている方向が出入口部」である可能性が指摘される。口縁部の向く方向は「ほぼ南側か東側を向いているものが多い。」

○酒々井町墨新山遺跡（中山1995）

墨木戸遺跡の西隣に位置し、18軒の「縄文時代中期」の住居跡の内の1軒が土器片圓炉部+土器埋設部の複構造炉となる。土器片圓炉には底面上にも上器大片が敷かれており、複式炉石組部の在り方と相向する。土器埋設部では底部を有する上器が炉壁面に斜位に設置され、設置土器の口縁部は炉底部に敷かれた土器片と接する部分が折り取られている。炉には合計で4個体分の「加曾利EⅢ式」土器が使用され、また炉の傍らからは石皿の出土がある。住居跡に「企画性」が認められるか否か報告が待たれる。

○成田市南羽鳥花輪内遺跡（中山1995）

狭い調査面積の中、検出された「加曾利EⅢ式」の住居跡が地床炉部+土器埋設部の複構造炉となる。炉壁面に底部を切断した土器が設置される。「炉の形態は墨木戸遺跡のものとよく似て」いる。詳細は報告を待ちたい。

○市原市武士遺跡（加納1995） 図10-8

大小二連の地床炉の大きい方が、地床炉部+土器埋設部の複構造炉となる。二段に掘り込まれる炉の段階部をやや深く穿ち、斜め 50° ほどの角度で底部切断の深鉢形土器が設置される。小さい方の地床炉、複構造炉の地床炉部+土器埋設部は一列に並んでおり、これを住居主軸とみた場合、炉を中心には左右対称の「側柱穴」が認められ、また主軸上の壁際には他と比べて径の一際大きな柱穴があり「軸頂柱穴」のように見える。複構造炉の土器埋設部が「軸底側」に位置することにはなるものの、概ね「企画性」の必要条件を満たしているようである。詳細は本報告を待ちたい。

○埼玉県児玉町古井戸遺跡 J-49住居跡（宮井1989） 図11

「太平洋側で分布の最南端に位置している」（森1996）複式炉の住居跡である。土器埋設部・石組部・前庭部が長軸に並び、炉長軸を中心には左右対称の「側柱穴」を有し、「軸頂柱穴」も認められ、福島県域の複式炉の住居跡と基本的に共通しており、設置土器も大木9式の深鉢形土器が用いられている。唯一異にしているのは、設置土器に対して石組部が「土器の頭

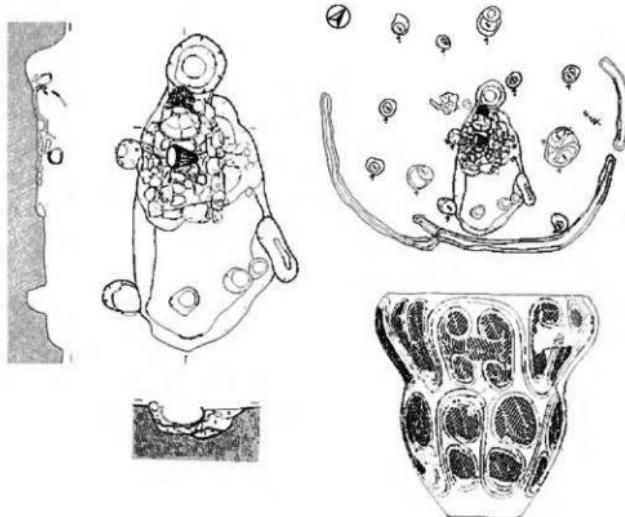


図11. 埼玉県古井戸遺跡の複式炉の住居跡

（住居跡1/100 炉1/50）

部～口縁部に沿うように半月形に配されており、上器を斜め（35°ほど）に立て掛けるような構造になっている」点で、これは下総台地における複構造炉の土器埋設部に同様である。ちなみにJ-49住居跡は、「環状集落」の環の軌道上にあるものの最も外側に位置している。

現在のところ、下総台地における複構造炉の住居跡は、印旛沼南岸域に多くの事例がみられるが明らかな「企画性」を認める住居跡ではなく、東京湾岸域では少ない事例ながらいずれにも「企画性」が認められる。土器設置方法には、炉内を穿って上器を埋設する方法、土を被せて土器を固定する方法の2種があり、前者は土器底部を切断し、後者は底部を有する形勢となっている。上記のほかにも、柏市林台遺跡（井上1989）において地床炉部+垂直位土器埋設部の複構造炉に一見される例—第20号・第52号住居跡が存在するが、炉セクション図をみると地床炉部と土器埋設部は切り合う状況にあり、且つ52号住では貼床下から柱穴が検出されおり、建て替え等に原因する2基の炉の重複の可能性があるので事例外とした。

（3）伴出土器の比較検討

曾谷台における加曾利E式の「新しい部分」の出土は、高谷津遺跡の複構造炉の住居跡のほかに、近年、向台貝塚で一定の機会にあらわる資料が報告されている。向台貝塚では数地点で加曾利E式の「新しい部分」が出土しているが、地点ごとに微妙な変化があり、また高谷津遺跡との比較においても変化が認められる。そこで向台貝塚の加曾利E式の「新しい部分」を抄録して、雑駄ながら各々比較検討することにしたい。

向台貝塚の範囲は「南北二つの大きな貝塚が向き合う、南北約100m、東西約70m」と認識されてきた（杉原・戸沢1971）。しかしながら向台貝塚の東側には広い範囲に亘って同時期の住居跡群が分布していることが、市教育委員会の事前調査によって明らかにされつつあり、東側の住居跡群は向台貝塚の住居跡群と一連のものと考える必要がある。堀越正行氏は從来の向台貝塚の範囲を「向台地区」、その東側の曾谷1丁目259番地所在遺跡と曾谷1丁目248番地所在遺跡を「平作地区」、曾谷1丁目194番地所在遺跡を「高徳穂地区」と呼称する（堀越1989）。以下の遺跡名標記はこれに倣うが、市教育委員会の調査地点番号は番地単位で付されており、平作地区では調査地点番号の重複が生じるので、平作地区を南・北に分けた（図12）。なお各地区の總称は向台貝塚とする（註3）。

○平作地区南第8地点6号住居跡出土土器（市川市教委1989） 図13～14

図示した土器は、「貝殻構成から、1シーズンの春を中心とした季節形成と予想される」（堀越1989）窓穴内貝層中出土（△）、貝殻と床面との間の薄い七層中出土（▲）、土器片開炉に使用されるもの（●）である。「キャリバー形土器」はいずれも口縁部が膨大することなく彎曲が弱い。口縁部文様帶は低い落線による渦巻文、区画文からなるが、渦巻文は「隆線を輪廓する沈線が目立つて」（山内1940）いて、むしろ沈線による描出といったほうが適当であり（2～5）、明らかに陥線描出であるものは円形区画文（1）に退化する。また渦巻文の



図12. 向台貝塚各地点位置 (1/3000)

文様内に縄文が施されるもの（3、4）は、渦巻文と区画文の別を不明瞭にしている。口縁部文様帶下端は区画が不全の傾向にあり、胸部文様帶の癒着するもの（2～4）がみられる。胸部文様帶は「縄紋の抹消が一般化」するが、磨消縄文部の幅は狭い。縄文は無節、単節、0段多条単節、複節あるいは撚糸文と変化に富み、同一器面に異なる撚りの縄文が施されるもの（2、7）もある。下総台地では「縄紋の抹消が一般化」する頃に特に、西の系統の連弧文土器や曾利式の突出が目立ち、ここも例外でない。連弧文土器は口端下に2列の刺突あるいは平行する沈線間に刺突が加えられ一周する。連弧文は辛うじて弧を描くものの弛緩が甚だしく、

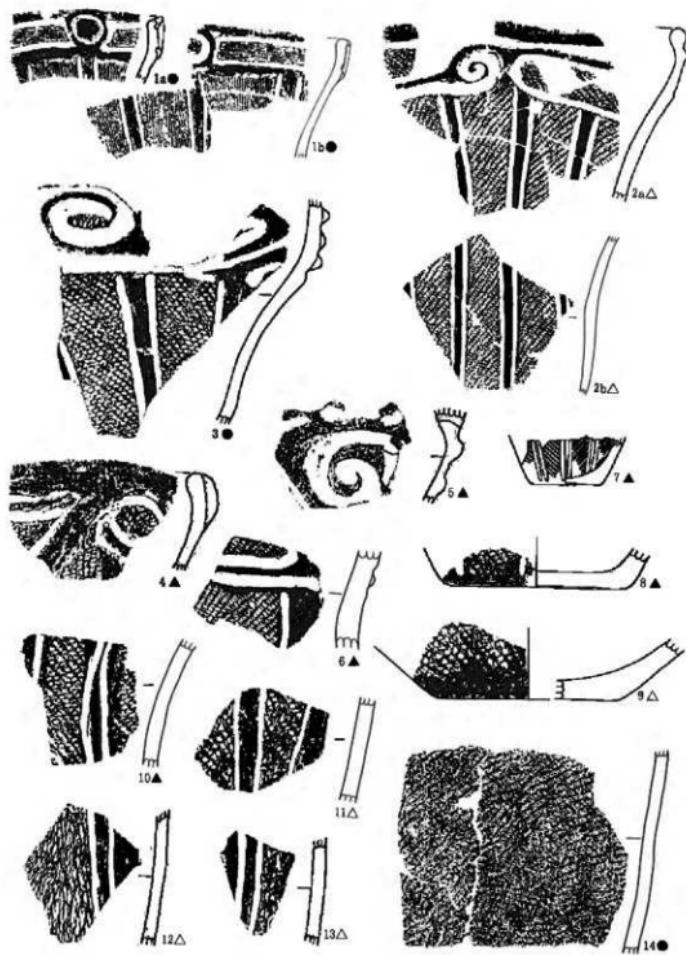


图13. 平作地区南第8地点6号住居出土土器 (1)

(1~2, 7 1/5 他1/3)

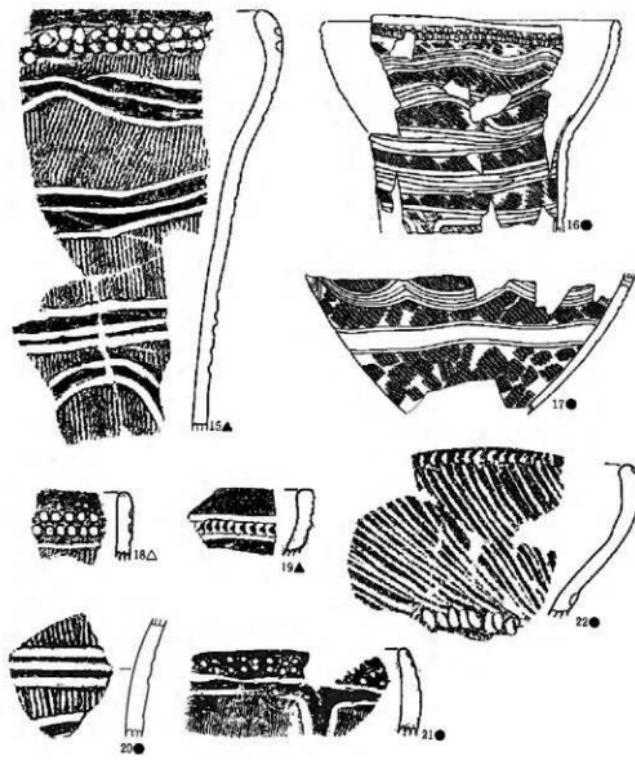


图14. 平作地区南第8地点6号住居跡出土土器 (2)

(实测图1/5, 拓影图1/3)

平行沈線化しており、器形が直線的となる（15）ことも相俟って、本来くびれ部を区画する平行沈線との別が明瞭でなくなる。胴部には比高差のある弧線文（15）、懸垂文（16）が描出され、口端下刺突の直下が懸垂文となるもの（21）は、口縁部文様の省略であろう。平行する沈線間は、狭いながらも繩文が磨消されるもの（15, 20）と、それが未発達なもの（16）とがあり、未発達のものは器形のくびれが強い。連弧文接続部が銳利である大形の浅鉢形土器（17）は下総台地あまり例をみない。繩文は単節と撚糸文の2種類となる。曾利式は頸部のくびれが非常に強い「籠目文土器」と呼称されるもの（22）で、口端とくびれ部に刺突が加えられ一周する。下総台地の当該期の曾利式はほぼ「籠目文土器」のみといってよい。

○平作地区北第2地点出土土器（市川市教委1988） 図15～16

約600m²の発掘区に散在する3軒のごく浅い皿状を呈する堅穴住居跡とその周辺からの出土であり、層位的・面的の繋まりの保障をやや欠くが、型式学的にみて振幅は小さいものと思われる。「キャリバー形土器」は口縁部の彎曲に強弱の差があるものの、口縁部文様帯には共通した退化傾向がみられる。渦巻文は明らかな沈線描出であり、区画文から派生して鉤状に退化する（2～3, 6）。沈線は「隆線を輪廓する」形ではなく、沈線に沿って隆線が付けられるもの——沈線に被る隆線が剥落している（2）、あるいは全く隆線を用いず沈線描出のみとなるもの（4）がある。口縁部文様帯下端の区画は不全の傾向にあるが、胴部文様帯の上端を磨消して区画を表わすもの（2, 6）がみられる。胴部文様帯は幅の狭い磨消繩文があるものと未発達なものがある。未発達なもの（1）は器形の彎曲がほとんどなく直線的で、口縁部文様が平行四辺形の区画文のみで渦巻文を欠いており、「隆線を輪廓する沈線が目立って来る」という観点で「新しい部分」と判断される。頸部に無文帯を有するもの（4）は、胴部文様が「意匠充填手法」（加納1994）に類似するが、大柄の渦巻文の内には繩文が無く、「意匠充填」の効果が乏しい等、異なる部分が多い。口縁部文様帯は区画文とそこから派生する沈線描出の退化した渦巻文からなり、渦巻文上の口端が少々突起する。耳状を呈する突起破片（9）は、大木9式に特徴的な口端に突起して発達する渦巻文に略同し、渦巻文上の口端の突起（4, 8）は大木9式に関連するのであろう。繩文は無節・単節・複節そして撚糸文と変化に富み、同一器面に異なる撚りの繩文が施されるもの（7）もある。連弧文土器（15～17）は口端下に刺突が加えられ一周し、連弧文は弛緩して波状沈線化もしくは平行沈線化している。連弧文接続部がやや銳利であるもの（16）も、接続部に乱れが生じる。口端下刺突の直下が懸垂文となるもの（13）は、懸垂文上端が閉じられておらず「キャリバー形土器」に通じよう。繩文は単節と撚糸文の2種類となる。曾利式は「籠目文土器」（19～22）で、口端とくびれ部に刺突が加えられ一周し、胴部に蛇行隆線が垂下する。「籠目文土器」と同様の器形のもの（14）は、くびれ部に同様の刺突が一周し、胴部が撚糸文の施される懸垂文となっている。鉢形で「頸部に一線を加え、以下体部は縱行する条線がくわえられて居る」（山内1940）もの（18）は、関東西部に

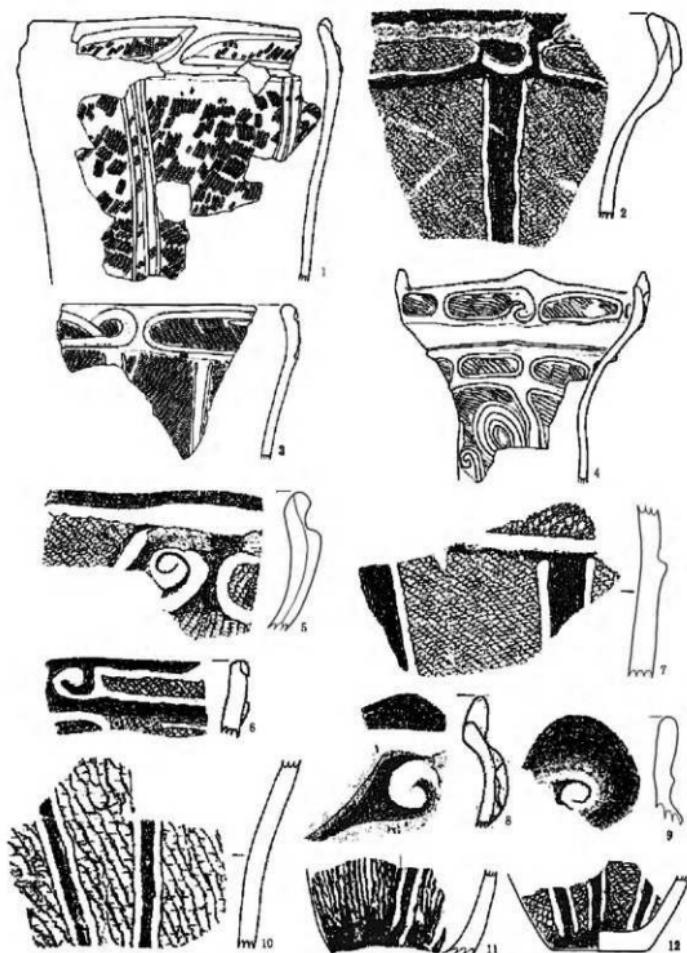


图15. 平作地区北第2地点出土土器 (1) (实测图1/5 拓影图1/3)

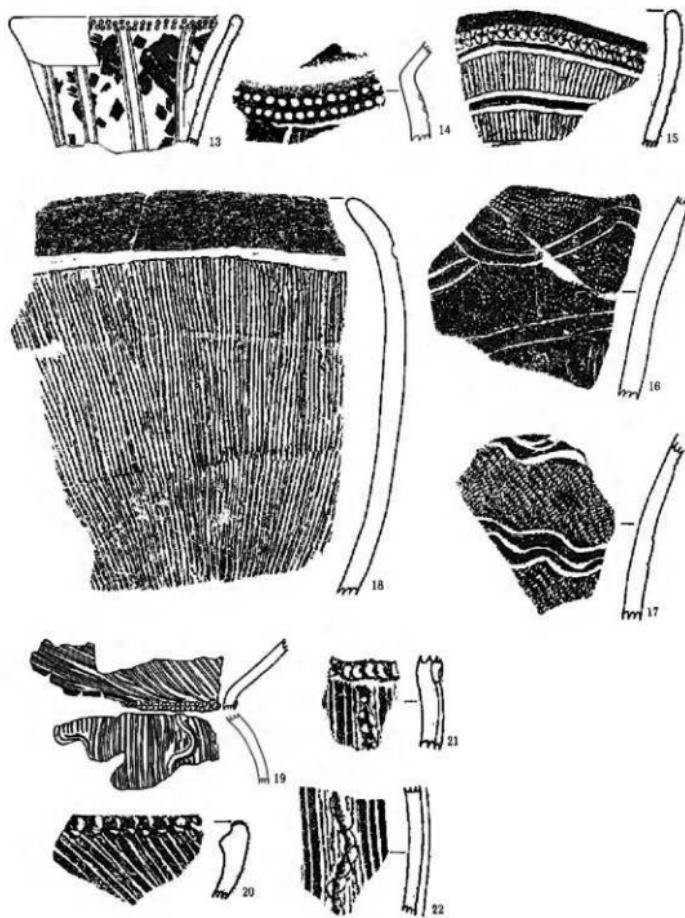


图16. 平作地区北第2地点出土土器(2)

(实测图1/5 拓影图1/3)

比較すると下総台地での出土は少ないように思われる。

○高徳穂地区第2地点4号住居跡出土土器（市川市教委1987） 図17

図示した土器は、床面に密着して出土したもの（1～11, 15）、堅穴内貝層中ないし埋土層出土のもの（12～14, 16～17）である。突起する渦巻文の「キャリバー形土器」（1）は、渦巻文の外郭部分内縁の隆線下を磨り凹めて立体化させる手法が、平作地区北の耳状を呈した突起する渦巻文（図15～9）と同様であり、大木9式の特徴を認める。口縁部文様帯下端の区画は不全であるものの、渦巻文から派生する隆線は発達しており、隆線は両側がよく研磨されて鋭利な稜線がつくられ断面三角形を呈す。器形は比較的内縁が強く、薄手である。他の「キャリバー形土器」は、渦巻文が沈線描出の形態化したものとなり、口縁部文様帯下端の区画も不全の傾向にある。胴部文様帯には幅の狭い磨消繩文であるもの、沈線が繩文部の上端を閉じるもの（2）、「キャリバー形土器」とは断定できないが磨消繩文部がY字形となるもの（3）がある。繩文部の上端を閉じるもの（2）は、「磨消繩文部が拡大し『懸垂紋効果が完全に繩紋部によって排出され』（加納1989）、磨消繩文部には端部鉤状の沈線が加えられている。磨消繩文の幅が狭いものには繩文部に蛇行沈線が加えられること（9）がある。なお繩文部の上端を閉じるものは、大木式では8b式で既にみられ、9式では加曾利E式と比べると一般的である。頸部に無文帶を有する細片（8）は、胴部文様が「意匠充填手法」であり、口縁部文様帯をもつものであろう。繩文は無節、単節、複節で、同一器面に異なる撚りの繩文が施されるもの（2）がある。撚糸文はみられない。口端下刺突の直下が懸垂文となるもの（15）は、刺突が一列で、胴部文様は磨消繩文が未発達である。連弧文土器（13～14）、曾利式（16～17）、継続する条線の鉢形土器（12）は、いずれも堅穴内貝層中ないし埋土層において細片でみられるのみで、明瞭な伴山状況はない。

○高徳穂地区第2地点6号住居跡出土土器（市川市教委1987） 図18

図示した土器は、確認面からの深さが10cmに満たない皿状を呈する堅穴住居跡の中央部の埋土層からの出土である。「キャリバー形土器」は渦巻文が全く痕跡化して、区画文状を呈すもの（1～2）は区画文との別は幅の大小と繩文の有無でみる外なく、鉤状となるもの（4）は鉤が区画沈線の一部を担っている。ただし口端が突出するもの（5）は渦巻文が形を保っている。隆線には低いながらも両側がよく研磨されてやや鋭利な稜線がつくられるもの（1）もあるが、口縁部文様帯の文様描出は沈線が目立っている。胴部文様帯は磨消繩文部の幅が全般的に広くなる傾向が認められる。磨消繩文部の幅が比較的狭いものには繩文部に蛇行沈線が加えられている（12）。わずかに外傾する波状口縁部の細片（6）は、口端直下に沈線による円形区画文か、または懸垂文が描出され、大木9式に類似する。口縁部文様帯、口端下刺突を欠く沈線描出の懸垂文のみの一群には、懸垂文が繩文部であるもの（7）磨消繩文部であるもの（9）があり、端部鉤状の一本沈線のもの（8）は「横位連携弧線文土器」の可能性がある。

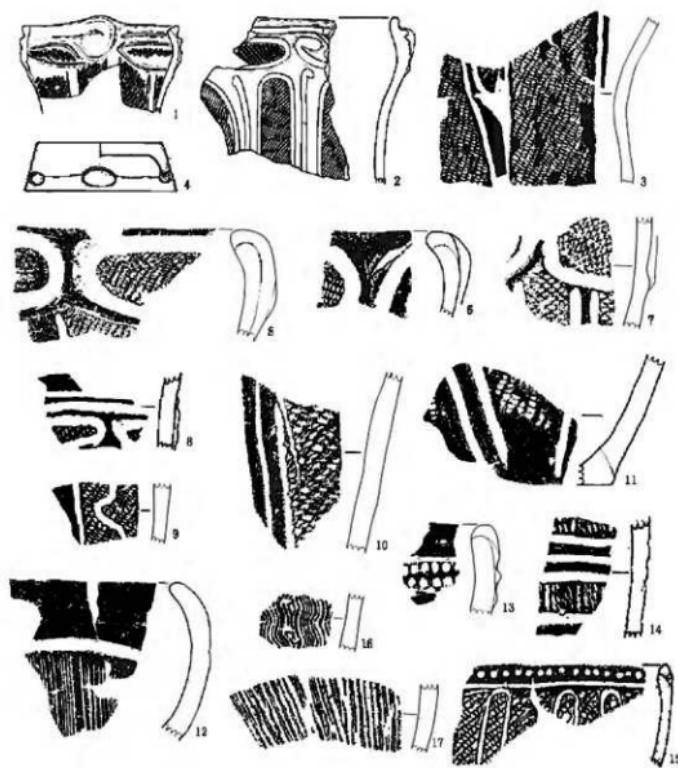


图17. 高德寺地区第2地点4号住居出土土器

(实测图1/5 拓影图1/3)

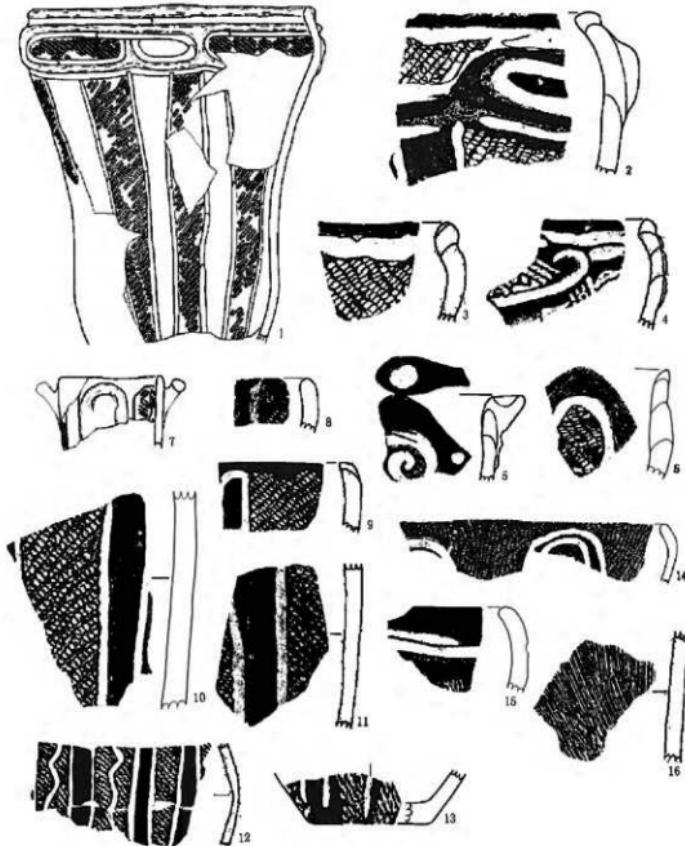


图18. 高德城地区第2地点6号住居出土土器

(实测图 1/5 拓影图 1/3)

横位橋状把手の付くもの（7）は、懸垂文の中に蛇行沈線が加えられており、器形は埼玉県域に類例が多い肩下部の膨れるフラスコ形であろう。「横位連携弧線文土器」（14）は弧線文間に懸垂文が入り組むものである。縞文は無節、単節、複節の3種類となり、撫糸文はみられない。条線のもの（15～16）は条線浅く且つ縱行しない傾向にある。連弧文土器・曾利式は全くみられない。

向台貝塚における土器の地点ごとの微妙な変化は、「キャリバー形土器」口縁部文様帯の退化傾向——主に渦巻文を視点にすると次の変遷序列が考えられる。〈1〉平作地区南第8地点6号住：渦巻文の描出が沈線化する、〈2〉平作地区北第2地点：渦巻文が明らかな沈線描出であり鉤状に退化する、〈3〉高徳跡地区第2地点4号住：渦巻文が形骸化する、〈4〉高徳跡地区第2地点6号住：区画文状を呈すなど渦巻文が全く痕跡化する。ただしこの間、大木9式に特徴的な突起する渦巻文が併出。これに関連して渦巻文上口端を突起させ〈2〉、大木9式の突起する渦巻文を採用し〈3〉、一時的に渦巻文が発達すると共に、渦巻文から派生する隆線に独特な研磨が施され、隆線研磨が後に続く〈4〉。〈1〉→〈4〉の変遷ではこのほかに、磨消繩文の拡大する方向を認め、縞文は「キャリバー形土器」に限らず種類を減じる方向を認める。如上の変遷序列において「キャリバー形土器」には間断を挟む余地はないと思われるが、連弧文土器・曾利式の併出が無くなる／大木9式の特徴が見い出される〈2〉～〈3〉、「横位連携弧線文土器」の成立〈4〉、という忽焉とする様を見る。とくに前者の忽焉とする様については、高谷津遺跡における複焼造炉の住居跡の山現に関わるであろう趨勢として着目したい。その高谷津遺跡における上器は、「キャリバー形土器」口縁部の渦巻文が喪失するも独特的の隆線研磨に通ずる部分があるので、〈4〉の後に続くものと位置づけら、同様の「横位連携弧線文土器」の併出がこれを傍証している。高谷津遺跡では大木9式の特徴を認める土器の出土はみられないものの、下総台地では〈2〉～〈3〉で見い出だされる大木9式の特徴の



図19. 大木9式（後出）の特徴を認める土器（1/8）

ものより後出となろう土器（図19）をしばしば目にし、類似するものが細片ながら〈4〉でも確認（図18-6）される。それら土器と高谷津遺跡の土器との先後関係の詳細は課題である。

3. 集塊する土坑墓群

(1) 土坑墓群の特徴

⑤地点P29～P35の7基の土坑が集塊する土坑墓群である（註4）。人骨は未検出ではあるが、土坑埋土はいずれも多量のロームを混える七層で、掘整～埋戻が短時間に行われた状況にあり、墓であろうことが推定される。残留脂肪酸分析等の検査は行われていない。

土坑は分布上、相互に密接し切り合ってブドウ状に塊まるP29～P34土坑の西群、傍らに炉が接するP35土坑の東群、に別れて約1.5mの間隙を挟む。土坑の形状と規模は、切り合いにより不詳となる部分もあるが、平面形が略円形を呈するP31・P33・P34は径110～120cm、梢円形を呈するP29・P30・P32・P35は径150～160cm×110～120cm。深さはP29・P32・P35が10～15cm、P30・P34が30～35cm、P31・P33が55～60cmで、略円形を呈するものは深く、

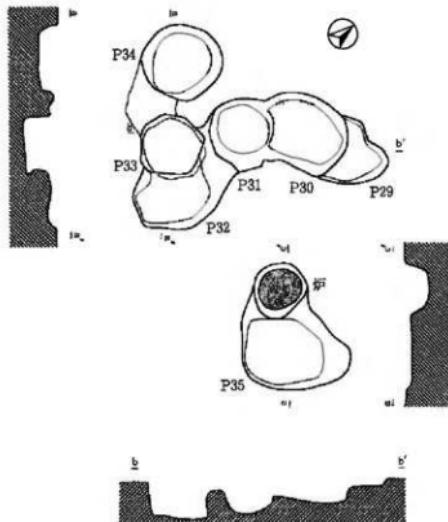
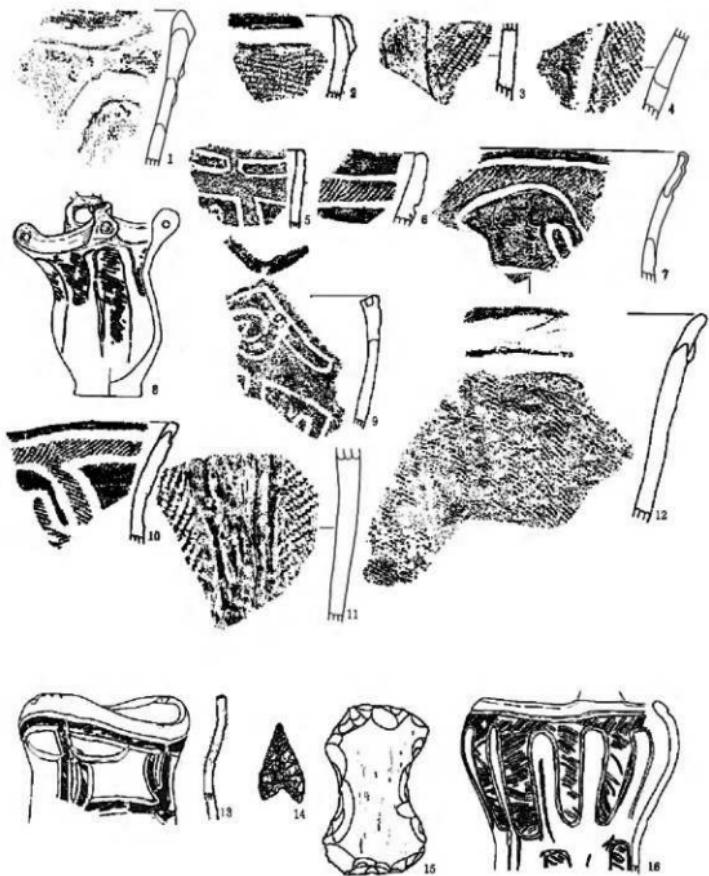


図20. 集塊する土坑墓群 (1/80)



中層上位出土 / 1~4 : P30 5~8 : P31 8~12 : P33
下層山土 / 13 : P33 14 : P34 15~16 : P35

圖21. 件出遺物 (實測圖1/5 拓影圖1/3 石器1/3)

楕円形を呈するものは浅い傾向にあり、2種の規格が存在するようである。なお深さについては、各々確認面から測っているが、埋土の性質から地山との区別が困難であることにより遺構確認は相当掘下げて行われているので、本来の深さよりも小さな数値となっている。土坑の新旧関係は、埋土が均質であるために土層観察に基づいての判断ができない。ただし、切り合う土坑は必ず深さを違える様子が認められ、新しい埋葬は従前の遺体を露出または損壊させぬよう墓坑が浅く、古い埋葬は将来の重複を予定して墓坑が深い、との想定が可能である。遺物の出土状況では、P30・P31・P33土坑の中層上部で夥しい数の土器細片が層を成し、ちょうど遺体の上を覆うかのごとく層位にある。土器細片がみられる土坑は共通して切り合い関係にある深いもので、前述した深い土坑は古い埋葬との想定からすれば、土器細片は、新しく重複して埋葬を行う際に古い埋葬遺体の存在を示す指標となつたであろう。報告書に図示される限りでの土器細片は、加曾利EIV式新段階ないし後期に下げる加曾利E式、称名寺式最古段階であり、P30・P31・P33土坑への埋葬は比較的短期間であったと考えられる。復元図で示される小形の深鉢形土器は、P31・P33土坑から他の土器片と共に細片となって出土し、接合の結果、完形に復し得たもので、P31・P33土坑への埋葬については同時と判断することができる。土器細片は一瞥するとランダムに集められているようにも見えるが、称名寺式最古段階のいずれもが比較的小形の土器の破片であり、また小形土器をわざわざ破碎して用いるなど、とくに小形土器が選定されている様子が窺える。また高谷津遺跡では称名寺式最古段階の土器の出土がP31・P33土坑に集中しており留意される。土坑下層からも遺物の出土がある。P33土坑では胴部下半を欠く深鉢形土器が横倒位で出土、2単位波状口縁で口径160mmの比較的小形の称名寺式最古段階であり、土坑中層上部の土器細片との型式変化はみられない。P34土坑では石鐵が出土する。P35土坑では打製石斧と横倒位で潰れた状態の胴部下半を欠く深鉢形土器が出土。土器は「横位連携弧線文土器」の「弧線紋と懸垂紋が、胴中位のくびれ部で対向するもの」であり、「弧線紋の横位の連携効果が強」く「E III式古段階」(加納1989)に位置づけられる。P35土坑の出土土器から判断すると、土坑墓群分布上での東群／西群の間隙には、時間的間隙を認めることがある。

P35土坑の傍らに接している炉は、略円形を呈し径約90cm、深さ約35cm、当該期の住居跡の地床炉との比較においては深さが卓越している。遺物の出土が無く時期は不明であり、重複は縁がわずかに接する程度であるので土層観察に基づく新旧判断もできない。位置的に炉を中心としてP29～P33土坑が弧を描くように分布し、且つ時間的間隙を認める古い土坑墓に接する様子から、炉は埋葬再開に際しての儀礼的行為の痕跡との解釈もできようが、推測の域を出ない。

(2) 変遷と系譜（予案）

高谷津遺跡における集塊する土坑墓群に類似する例は、松戸市一の谷西貝塚36号土塙 a～m

(前田・川名1994)、市川市権現原貝塚1号・2号土坑墓群(渡辺1991)の2遺跡3例が管見に触れるに止どまり、地理的には下総台地西南端域の半径約2.5kmの狭い範囲内での検出となっている。類似する例を挙げて比較検討するには未だ資料僅少に過ぎるのが現状であるが、若干の予察を付記したい。

一の谷西例は、伴出土器から判断すると例中やや時期が新しく称名寺式古段階まで出土がみられ、他の土坑墓群とは些か形状を異にしている。すなわち、12基前後の土坑が切り合い集塊するものであるが、重複により十坑壁の大半が失われ、隣り合う土坑の高低差が小さく、完掘状況が約4.5m×3mの不整形を呈する竪穴造構のような形状となり、いわば反復追葬によって1つの竪穴造構を造る様にある。これとは逆順の竪穴造構へ遺体を反復追葬する事例は、堀之内1~2式期の東京湾東岸域を中心に屢々みられ、遺体数の判明している船橋市古作貝塚事例が14体(岡崎・森本1983)、同市宮本台貝塚事例が13体(渡辺1994)であり、一の谷西例の土坑数に近い数字となっている。竪穴造構への反復追葬については、権現原貝塚における集塊する土坑墓群を改葬して造られた人骨集積から続くものと予察した(渡辺1994)が、改葬または再葬を経ない一の谷西例のような集塊する土坑墓群から続く場合も考慮する必要がある。

高谷津例、権現原の2例には、称名寺式最古段階の土器もしくは西日本系統の磨消繩文土器が伴出し(註5)、下総台地西南端域でのこれら土器の出土は、特に集塊する七坑墓群に集中する傾向がある。こうした伴出土器の在り方を視点とするならば、集塊する土坑墓群の系譜は西に求められることになり、現在のところでは立川市向郷遺跡(立川市向郷遺跡調査会1992)の土坑墓群が候補に挙げられる。向郷遺跡の土坑墓群は中央広場を取り囲んで環状に分布し、その外側をピット群、住居跡群が巡る。土坑墓は約293基検出され、「墓壙の重複関係と長軸方向」を指標に群別される(西澤1994)。一単位群が、土坑墓の数の多寡を除けば、集塊する上坑墓群と類似する形状になっている。遺物の出土状況については猶検討を要するが、胸下半を欠く深鉢形土器が横倒位にある、多数の土器細片が土坑内にみられる等、共通する部分が認められる。伴出土器は加曾利E式「新しい部分」が大半のようである。

おわりに

管見するところでは、下総台地において「環状集落」の形成が止む頃の加曾利E式「新しい部分」に伴出する異系統の土器は、〈西〉の連弧文土器、曾利式「龍目文土器」が目立っている。「環状集落」直後の集落跡では、連弧文土器、曾利式「龍目文土器」がほぼ払拭されて、〈北〉の大木9式の特徴が屢々抽出されるようになり、複構造炉の住居跡が出現する。ただ複構造炉の住居跡の出現は、炉設置土器をみると多くの事例のみられる印旛沼南岸域が古いようであり、あるいは東京湾岸域での「環状集落」の形成が止む以前であるかもしれない。「環状集落」と内陸部大規模集落跡との加曾利E式「新しい部分」に年代的重複が認められるか否か

は、大きな問題を孕んでおり、いずれ機会をみて比較検討しなければならない。

暫く仮説されていた〈西〉の系統は、“称名寺式”的成立、柄鏡形住居跡の出現等、忽焉と下総台地を席捲する。現在のところ西南地域に限られる事象ではあるが、成立時における“称名寺式”は集塊する土坑墓群に付随する様にあり、その集落跡には例外なく出現期の柄鏡形住居跡が存在している。集塊する土坑墓群は、幾通りかの変遷の途を考慮しなければならないが後期の墓制の素地であることが予察され、多数遺体集積合葬の変遷と併せて再検討したい。

註

- 1) “複構造炉”なる呼称は、加納氏の字句（加納1995）を拝借した形になるが、氏の「複構造の炉跡」とは語義をやや異にしているかもしれない。混乱が生じるようであれば直ちに呼称を変更するつもりでいる。
- 2) 報告記載の不明な点や調査時の詳細については、調査担当者の花輪宏氏からご多忙中にも拘らず懇切ご教示いただいた。
- 3) 向台貝塚平作地区・高徳郷地区の名称は当初、番地名が使われていたが、『千葉県埋蔵文化財分布地図(1)－東葛飾・印旛地区－』(1985)では「向台東遺跡」とされ、『千葉県市川市埋蔵文化財分布地図』(1989)では「曾谷南遺跡」とされており、統一が図られていない。なお1993年までに平作地区北で2地点、平作地区南で10地点、高徳郷地区で4地点に及ぶ調査が実施されているようである。
- 4) 堀越氏は「四〇基を越える塊状の土塙墓群」(堀越1985・1986)であると紹介されるが、「曾谷貝塚周辺遺跡第7地点」=高谷津遺跡⑤地点では土坑の总数が20基に満たない。そして土坑墓であると認識されるものは、P29～P35の外には認められない。
- 5) 市川市教育委員会 1987『堀之内－市川市堀之内土地区画整理事業予定地内遺跡発掘調査報告書－』P212、「第145図 土坑出土遺物(1)」の中段に掲載されるNo.4～13の土器拓影図はP11土坑出土となっているが誤りである。P176土坑(2号土坑墓群中の1基)出土が正しい。これは遺構番号の変更に原因し、旧称P11土坑→新称P176土坑に際して遺物注記が旧称のまま行われたことによる。1992年11月原図照合のうえ確認済。

参考文献

- 市川市教育委員会 1987「3. 曾谷1丁目 194番地所在遺跡第2地点」『昭和61年度市川東部遺跡群発掘調査報告書』(高徳郷地区)
- 市川市教育委員会 1988「1. 曾谷1丁目 259番地所在遺跡」『昭和62年度市川東部遺跡群発掘調査報告書』(平作地区北)

- 市川市教育委員会 1989「1. 向台東遺跡（曾谷1丁目 248番地所在遺跡）」『昭和63年度市川東部遺跡群発掘調査報告』(平作地区南)
- 市川市教育委員会 1989『千葉県市川市埋蔵文化財分布地図』
- 井上文男 1988『柏市埋蔵文化財調査報告書14－林台遺跡－』柏市教育委員会
- 岡崎文喜・森本岩太郎 1983『古作貝塚II』船橋市遺跡調査会
- 小片 保・森本岩太郎 1974『宮本台遺跡出土人骨について』『宮本台II』船橋市教育委員会
- 柄沢敏一・森沢佐歲
- 岡本 勇 1963「横須賀市吉井城山第一貝塚の土器（二）」『横須賀市博物館研究報告（人文科学）』第七号
- 岡本 勇・戸沢充則 1965『関東』『日本の考古学 II -縄文時代-』河出書房新社
- 加納 実 1988『千葉県における加曾利E式土器後半の様相』『縄文中期の諸問題』群馬県考古学研究所
- 加納 実 1994『加曾利E III・IV式土器の系統分析－配列・編年の前提作業として－』『貝塚博物館紀要』第21号 千葉市立加曾利貝塚博物館
- 加納 実 1995「下総台地における加曾利E III式期の諸問題－集落の成立に関する考察を中心として－」『研究紀要16～20周年記念論集－』千葉県文化財センター
- 上守秀明 1992『多田遺跡』『多田遺跡出土土器にみる加曾利E III式後半の様相』『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書VII』千葉県文化財センター
- 上守秀明・西野雅人 1993『千葉東南部ニュータウン18-鎌取遺跡-』千葉県文化財センター
- 喜多圭介 1989『長田王子ヶ原遺跡・長田香花田遺跡』印旛郡文化財センター
- 子和清水貝塚発掘調査団 1976『子和清水貝塚-遺物図版編-』松戸市教育委員会
- 子和清水貝塚発掘調査団 1978『子和清水貝塚-遺物図版編1-』松戸市教育委員会
- 子和清水貝塚発掘調査団 1985『子和清水貝塚-遺物図版編2-』松戸市教育委員会
- 渋谷 貴・青山 博 1987『一本松遺跡の構造と遺物』『寺崎遺跡群発掘調査報告書』佐倉市寺崎遺跡群調査会
- 市立市川考古博物館 1986『市川の縄文土器 I -収蔵の早・前・中期の土器-』
- 杉原重夫 1971『地形の発達』『市川市史』第一巻
- 杉原莊介・戸沢充則 1971『貝塚文化-縄文時代-』『市川市史』第一巻
- 立川市向郷遺跡調査会 1992『向郷遺跡』立川市教育委員会
- 中山俊之 1995『墨木戸』印旛郡文化財センター
- 中山俊之 1995『斜位土器埋設炉について』『墨木戸』印旛郡文化財センター
- 西澤 明 1994『縄文時代中期・後期の墓址における区分原理』『東京考古』12
- 西野 元・岡崎文喜 1971『高根木戸』船橋市教育委員会

- 西野雅人 1995「千葉市有吉北貝塚の調査と整理」動物考古学研究会発表要旨
- 堀越正行 1985「市川市株木東遺跡環状土塙墓群考」『史館』第十八号
- 堀越正行 1986「京葉における縄文中期埋葬の検討」『史館』第十九号
- 堀越正行 1989「(向台東遺跡)小結」『昭和63年度市川東部遺跡群発掘調査報告』市川市教育委員会
- 前田 潮・川名広文 1984『一の谷西貝塚発掘調査報告書』一の谷遺跡調査会
- 宮井英一 1989『古井戸-縄文時代-』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 目黒吉明 1982「住居の炉」『縄文文化の研究』第8巻、社会・文化 雄山閣
- 森 幸彦 1996「複式炉小考」『論集しお考古-目黒吉明先生頌寿記念-』
- 森 幸彦・辻 秀人・藤原妃敏 1985『'84塩沢上原A遺跡発掘調査概報』福島県立博物館調査報告第10集 福島県教育委員会
- 山内清男 1940『日本先史土器図鑑』第IX巻、加曾利E式 先史考古学会(1967再版・合冊)
- 渡辺 新 1991『縄文時代集落の人口構造』千葉県櫻見原貝塚の研究Ⅰ 私家版
- 渡辺 新 1994『多数人骨集積の類例追加と推論』私家版
- 渡辺 新 1995「下総台地における石棒の在り方(暫見) -市川市高谷津遺跡の出土事例から-」『利根川』16

挿図出典

- | | |
|-----------------------------|-------------------------|
| 図1 (杉原重1971)(市川市教委1989) 加除筆 | 図2 (市川市教委1987) 加除筆 |
| 図3 (市川市教委1981~1987) 合成加除筆 | 図4 (市川市教委1986) 加除筆 |
| 図5 (市川市教委1984) トレース加除筆 | 図6 (市川市教委1984) |
| 図7 (森1996)(市川市教委1984) 加除筆 | 図8 (渋谷・青山1987)(中山1995) |
| 図9 (中山1995) | 図10 (中山1995)(加納1995) |
| 図11 (宮井1989) | 図12 (市川市教委1989) 加除筆 |
| 図13 (市川市教委1989) | 図14 (市川市教委1989) |
| 図15 (市川市教委1988) | 図16 (市川市教委1988) |
| 図17 (市川市教委1987) | 図18 (市川市教委1987) |
| 図19 (上守・西野1993)(井上1989) | 図20 (市川市教委1984) トレース加除筆 |
| 図21 (市川市教委1984) | |